

恋愛相互作用がカップルの関係関与性に 及ぼす影響：投資モデルの再検討

中村 雅彦・中田 文

(社会心理学研究室)

(平成14年5月16日受理)

The influences of romantic interaction on the couple's commitment for their relationship : A reexamination of the investment model.

Masahiko NAKAMURA and Aya NAKATA

問題と目的

親密な対人関係の発展と持続を説明・予測するモデルとして、Rusbult (1980, 1983) が提唱した投資モデルがあげられる。このモデルの特徴は、関係の継続意志を表す概念である関係関与性 (commitment) を規定する変数として、報酬, コスト, 比較水準, 選択比較水準等の社会的交換要素に加えて「投資 (investment)」の概念を提唱している点にある。投資モデルに関わる諸変数は、友人関係や恋愛関係の持続に対して強い説明力を示すことが明らかにされている (e.g. 中村, 1990; 中村, 1991; Hendrick, Hendrick, & Adler, 1988)。

ところが、投資モデルに関する従来の研究では、いずれも社会的交換要素全般の状態を抽象した全体尺度 (global scale) を使用しながら投資や関係関与性などの変数を測定しているため、恋愛関係の多様性や恋愛の特質が十分に考慮されていないという問題があげられる。

このことから、従来採られてきた全体尺度によって関係関与性の規定因を検討するだけでなく、個別的な尺度を構成し投資モデルに関わる諸変数を測定することによって、投資モデルの精緻化が可能になり、恋愛関係の持続を規定する要因を具体的に明らかにすることが必要であると考えられる。

そこで、本研究では投資モデルに基づいて、恋愛関係の持続を規定する要因を詳細に明らかにすることを目的とする。以下に、投資モデルの特徴をあげ、恋愛関係への適用可能性と、モデルの精緻化に際して留意すべき点について検討する。

まず、投資モデルの特徴として、投資 (investment) が関係関与性を高める要因とされている点があげられる。このモデルは2つの公式によって示される。

$$\text{公式 1 : SAT} = (\text{REW} - \text{CST}) - \text{CL}$$

$$\text{公式 2 : COM} = \text{SAT} + \text{INV} - \text{Clalt}$$

ここで、公式1に示されたSATは関係満足感(satisfaction)、REWは報酬(reward)、CSTはコスト(cost)、CLは比較水準(Comparison Level)を示す。公式1によると、ある関係に対する満足感は、その関係から得られる報酬と関係に費やしたコストの差から、個人の持っている比較水準を差し引いたものに等しくなる。したがって、報酬からコストを減じたものが比較水準を上回るほど、高い満足感を感じると予測される。

次に、公式2で示されたCOMは関係関与性(commitment)、INVは投資(investment)、Claltは選択比較水準(Comparison Level for alternative)である。関係関与性とは対人関係の持続性に関わる概念であり、所与の関係を継続しようとする意志と、その関係にどの程度深く関与しているかに対する認知からなる。

また、投資とは、関係に直接的あるいは間接的に投入された資源全般をさす概念である。直接的な投資には、時間や情緒的努力、自己開示などが含まれる。また、間接的な投資には、その関係と結びついた物質的所有物や活動・人・物・出来事や、共通の友人、共有された思い出などが含まれる。

ここで、投資そのものは評価的には中立的な意味を持っていることに注意する必要がある。投資は関係に「投入された」すべての資源をさすが、投入されている資源が必ずしも正や負の意味を持つとは限らない。例えば、「交際相手に電話をかける」という行動自体は投資であるが、ある人は嬉々として電話をかけるかもしれない。またある人はいやいやながら電話をかけるかもしれない。つまり、その投資に対して個人が評価を行った結果、報酬価ないしコスト価が生じると考えられる。

さらに、公式2によると、関係関与性は、関係満足感に投資を加えたものから選択比較水準を減じたものとして表される。よって、公式1及び公式2より

$$\text{公式 3 : COM} = \text{INV} + (\text{REW} - \text{CST}) - (\text{CL} + \text{Clalt})$$

が導かれる。つまり、これまでに注ぎ込まれた投資に報酬からコストを引いた値が比較水準と選択比較水準を考慮した値より大きくなるほど、関係を続ける意志が高まると予測される。比較水準は、これまでの対人関係の中で形成された個人に内在する判断規準であり、これまで友人関係や恋愛関係で快適な経験が多い人ほど比較水準は高くなると考えられる。したがって、一般に比較水準の高い人ほど関係満足感を感じにくくなると予想される。

一般に、代替的關係から期待できる成果量が少なく、現在の交際相手以外との関係に移行するコストが大きいほど、現在の関係を続ける意志が高まると予想される。さらに、一般に、交際が始まってから時間が経過するにつれて投資量は増大する。投資量が増大することによって関係関与性も増大するため、交際期間が長いほど関係を続ける意志も強まることが示唆される。

Lund (1985) は、異性関係における関係関与性と投資量を測定するための尺度を開発し、これを検証した。彼らは大学生を対象に、関係関与性、投資、報酬、愛情度を測定し、関係の発展段階別に比較を行っている。

その結果、関与性と投資は関係の進展に伴って増加することが明らかになった。一方、相手

との関係から得られる報酬や愛情度は、婚約したカップルまで増加傾向を示すものの、結婚後は低下することが明らかにされた。

中村 (1991) は、投資モデルが他のモデルと比較して恋愛関係に高い説明力を持つことを明らかにしているものの、関係満足感におけるコストの役割については問題があることが指摘されている (奥田, 1994)。

すなわち、投資モデルによれば、コストが増加するほど関係満足感は低下すると予測されるが、関係が長くなるに従って報酬もコストともに上昇する傾向があり、コストは満足感と一貫した関連がないことや (Rusbult, 1983)、予測とは逆に正の相関を示すこともある (中村, 1990)。

奥田 (1994) は、投資モデルでは、コストを「相手の欠点や関係から得られる負の側面」 (Rusbult, Johnson, & Morrow, 1986) と言ったとらえ方をしている点に問題があり、恋愛関係においてコストは相手から与えられるのではなく、自らの行動に伴って生じるものであると指摘している。

奥田が指摘する点については検討の余地があると思われる。というのも、Rusbult (1983) では、投資モデルに関わる諸変数は、関係全般に対する評価を求める全体尺度によって測定されている。そのため、投資量を測定する際には、「その関係が終わるとすると関係と結びついている資源をどの程度失うことになるか」、「関係にどの程度の投資を行ったか」を質問し、報酬とコストは、「その関係がどれほど報酬的 (rewarding) か」あるいは「コスト的 (costly) か」についてのみ尋ねるにとどまっている。

また、中村 (1991) では、投資を二人の関係のためにどの程度“尽くして”いる程度として測定し、報酬及びコストについては、それぞれ関係全般を振り返ったとき、相手からの働きかけに対してどの程度“ありがたい”か“負担”なのかを尋ねるにとどまっている。

しかし、本来評価的に中立な意味しか持たないと定義されていた投資が、従来の研究では必ずしも中立的に測定されていないと考えられる。たとえば、Rusbult (1983) では、その関係が持つ報酬価及びコスト価を尋ねている。一方、中村 (1991) では、相手の行動に対して感じられる報酬価とコスト価が測定されている。

また、従来の方法では、全体尺度によって関係に対する評価を求めているため、投資や報酬、コストといった変数は抽象化されて把握されていると言える。したがって、個別尺度に示された具体的な相互作用が、実際にどの程度行われているかを測定することによって、行動的側面から投資モデルに関わる諸変数を詳細に把握することが可能になると考えられる。さらに、それらの投資の多寡を考慮することによって、それぞれの投資がどのような報酬価及びコスト価をもつのかを明らかにすることが出来るであろう。

つまり、“関係に尽くしている程度”とは全般認知的な指標であり、それぞれの相互作用が“どの程度当てはまるか”は個別認知的な指標であると言える。それゆえ、具体的な相互作用について記述された尺度を使用して、個別的に関係を捉えることによって、上記の問題点が解決され、投資モデルの精緻化が可能になるのではないだろうか。

さらに、Sternberg (1988) が指摘しているように、人物に対する関与性 (commitment) と関係に対するそれとは明確に区別されるべきである。したがって、関係に対する認知を測定するのか、交際相手に対する認知を測定するのかを明確にする必要がある。

本研究におけるもう1つの目的は、恋愛関係に関する資料をカップル単位で収集し、分析を

加えることである。従来の研究は、恋愛関係を交際関係にある回答者の一方の認知でとらえているものが多い。こうして得られた知見はあくまでも個人単位での回答から得られたものであり、必ずしも恋愛「関係」の様態を把握しているとはいえない (e.g., Rusbult, 1983; 松井, 1990; 中村, 1991)。

そこで本研究では、個人がどのような行動を行っているかではなく、その関係において二者間でどのような相互作用が行われ、それらの相互作用がカップルを構成している男女によってそれぞれどのように評価されているかを測定することによって、恋愛関係を全体としてとらえることにする。

方 法

1) 調査対象

国立大学の心理学講義を履修している学生に調査への参加を依頼するとともに、これら心理学履修生を通じてその知人にも調査に対する協力を依頼した。そして、本研究では、調査に協力した446名のうち、カップルで参加した284名(男女各142名)の資料について分析を行うこととした。なお、このうち、親密度認知を尋ねる質問で相手を互いに“恋人”であると認知していたカップル138組(276名)が最終的な分析対象となった。また、欠損値を含むデータについてはその都度分析から除外した。回答者の年齢は17歳から30歳にわたり(平均年齢20.23歳)、交際期間は1ヶ月未満から48ヶ月に及んでいた(平均交際期間13.25ヶ月)。

2) 調査手続き

① 調査依頼

本調査の性質上、調査の実施には慎重を期した。すなわち、回答者の現在ないし過去の恋愛関係について具体的に質問する内容が含まれており、回答者に不快感を与えるおそれがあった。また、カップル単位での参加協力を要請し、カップルにおける相互作用の様態について詳細にデータを収集する目的を持っているという理由から、調査への参加はあくまでも任意であること、収集されたデータは守秘されることなどを回答者に十分説明し、納得と了承を得るという手続きを経て調査を実施した。

さらに、調査用紙の末尾には意見・感想欄を設け、回答者の疑問や調査に関する不明点などを把握するよう努めた。これら回答者の疑問については、後日講義時間を利用して資料を配布するなどして説明を加え調査を終了した。

② 調査用紙の回収方法

カップル単位での参加者には、調査用紙2部と封筒2部を配布した。これらカップル参加の回答者には、同一番号が記入されている2枚の封筒に回答後の調査用紙をそれぞれ1部ずつ入れ、封印したのち所定の提出箱へ投函するよう依頼し、カップルの識別には封筒に書かれた番号を使用した。

3) 質問紙の構成

調査用紙は以下の質問紙とフェイスシートから構成されている。

① フェイスシート

フェイスシートでは、回答者のデモグラフィックな特徴を見るための質問を行い、その後、予備調査 I と同様の手続きで回答者の交際経験について質問した。すなわち、今までに特定の異性と交際したことがあるかどうかによって、回答者を「現在交際中（以下、A 群と略）」、「過去に交際経験あり（以下、B 群と略）」、「現在・過去を通して交際経験なし（以下、C 群と略）」の 3 群に分類した。

続いて、A 群については「現在交際中の相手」との関係を、B 群については「一番最近つきあっていた相手」との関係を、C 群については「現在一番親しくしている異性」との関係を、それぞれ思い浮かべて以下の質問紙に回答するよう教示した。

これらの回答及び教示を行った後、回答者が想定した異性との関係を「恋人」、「親友」、「友達」、「片思い」から選択させた。さらに、相手の学職、交際期間、交際のきっかけなどを尋ね、回答する際の注意事項を表記して質問紙への回答を求めている。

② 恋愛相互作用尺度 (RIS)

この尺度は 20 項目から構成されており、恋愛関係の認知的・感情的・行動的側面を反映した、二者間の相互作用の様相を見るための尺度である。大学生を対象とする予備調査を通じて、恋愛関係の形成（互いに感情的にのめり込むこと）、恋愛関係の維持（互いの気持ちを理解しようとする）、恋愛関係の崩壊（お互い自分だけの生活を大切にすること）、恋愛関係の修復（喧嘩になっても、別れたくないという意志をお互い示すこと）といった恋愛関係の各位相に関わる対人的相互作用についての具体的な記述の収集を行った上で構成した。

その上で、それぞれの項目について、投資モデルに関わる諸変数である「投資」、「報酬」、「コスト」、「比較水準」、「選択比較水準」を測定した。各変数を測定するための質問文は、中村（1991）及び Rusbult（1983）を元に作成した。

a). 質問 A（投資）：まず質問 A として、それぞれの項目が回答者の想定した関係に“どの程度当てはまるか”について、「非常に当てはまる（9）」から「まったく当てはまらない（1）」の 9 件法で回答を求めた。この回答結果によって、所与の恋愛関係における実際の投資量が測定される。

b). 質問 B（報酬）：次に質問 B では、それぞれの項目がどの程度“ありがたい”と感じられるか、「非常にありがたい（9）」から「まったくありがたくない（1）」の 9 件法で回答を求めた。この回答結果によって、実際の投資量が持つ報酬価が測定される。

c). 質問 C（コスト）：質問 C も同様に、それぞれの項目がどの程度“負担”に感じられるか、「非常に負担（9）」から「まったく負担でない（1）」の 9 件法で質問した。この回答結果によって、実際の投資量が持つコスト価が測定される。

d). 質問 D（比較水準）：さらに、質問 D では比較水準を測定した。従来の研究においては、計算の簡便化のため比較水準は無視されている（e.g. 中村, 1991；Rusbult, 1980；1983）。そこで、Thibaut & Kelley（1959）及び Rusbult & Buunk（1993）を参考に比較水準の概念に従って質問文を作成し、それぞれの事柄が“最低限度の程度あるのが望ましいか”について「非常にあるのが望ましい（9）」から「まったくないのが望ましい（1）」の 9 件法で質問した。

e). 質問 E（選択比較水準）：最後に、質問 E で選択比較水準を測定した。この質問では、相手との関係と別のパートナーとの関係とを比較したとき、それぞれの項目がどの程度“あり

得る”かについて、「非常にあり得る（9）」から「まったくあり得ない（1）」の9件法で回答を求めた。

なお、質問B及び質問Cでは、実際の投資量とその投資に対する報酬価及びコスト価を測定するため、回答の際には質問Aの回答をふまえて答えるよう教示した。

③ 社会的交換尺度

中村（1991）を参考に作成された、投資モデルに関わる諸変数について測定するための上位尺度で、恋愛関係の認知的側面を見るため、関係全般に対する評価を求めている。

- a). 投資尺度：その関係に“尽くしている”程度について「非常に尽くしている（9）」から「まったく尽くしていない（1）」の9件法で測定された。
- b). 報酬尺度：二人の関係全般を振り返ったとき、相手からの働きかけをどの程度“ありがたい”と感じるか、「非常にありがたい（9）」から「まったくありがたいくない（1）」の9件法で測定された。
- c). コスト尺度：二人の関係全般を振り返ったとき、相手からの働きかけをどの程度“負担である”と感じるか、その程度について「非常に負担（9）」から「まったく負担でない（1）」の9件法で尋ねている。
- d). 選択比較水準尺度：現在の交際相手以外の人と恋愛関係を持つことに対してどの程度興味があるかについて「非常に興味がある（9）」から「まったく興味がない（1）」の9件法で尋ねている。

④ 関係関与性尺度

Lund（1985）を参考に作成された、関係関与性（commitment）を測定するための尺度である。関係を続ける意志、関係に“関わっている”程度、関係が続く見込みなどに関する質問9項目から構成される。それぞれの項目について肯定的な回答（9）から否定的な回答（1）を9件法で測定している。

⑤ 関係満足感尺度

Rusbult（1983）及び中村（1991）を参考に作成された。「関係に対する満足感」、「相手に対する満足感」、「相手に対する好意の程度」の3項目で構成される。関係関与性尺度と同様、肯定的な回答（9）から否定的な回答（1）を9件法で測定している。

結果と考察

1) 恋愛相互作用尺度の構造

恋愛関係尺度計20項目について測定された投資量を指標として主因子法 EQUAMAX 回転による因子分析を行い、因子負荷量が低い項目を削除した結果、3因子が抽出された。これらの項目に基づいて、恋愛関係における行動的側面を測定する尺度として恋愛相互作用尺度（Romantic Interaction Scale：RIS）を構成した（Table 1）。

第1因子には、「互いに感情的にのめり込むこと」、「喧嘩の後、互いの愛情を認め合うこと」、「喧嘩の後、互いに謝ること」など、関係形成時及び関係修復時に見られる相互作用として記述されていた項目に高い因子負荷が見られた。したがって、これらは関係を維持するための相互作用であると考え、第1因子を「恋愛関係維持行動」因子（以下、維持因子と略）と命名した。

Table 1 RIS で測定された投資について因子分析を行った結果（主因子法 equamax 回転）

原尺度名	項目番号	項目の内容	h ² (共通性)	RIS 関係維持因子	RIS 関係深化因子	RIS 単独行動因子
EPI 尺度 (恋愛関係形成尺度)	1	友人を含めてどこかへ出かけること	0.07	0.01	0.24	-0.09
	2	いろいろな話をする事	0.34	0.24	0.50	0.18
	3	共通した趣味を持つこと	0.20	0.20	0.40	0.04
	4	一緒にいようと努めること	0.55	0.44	0.45	0.39
	5	互いに感情的にのめり込むこと	0.41	0.50	0.31	0.24
MNTE 尺度 (恋愛関係維持尺度)	6	正直な気持ちを伝え合うこと	0.52	0.40	0.57	0.19
	7	お互い、言いたいことを言い合うこと	0.51	0.35	0.61	0.09
	8	互いの価値観を認め合うこと	0.55	0.24	0.69	0.08
	9	互いの気持ちを理解しようとする事	0.71	0.37	0.72	0.24
	10	一緒にいてもお互い気を使わないこと	0.29	0.23	0.46	0.17
REPR 尺度 (恋愛関係修復尺度)	11	喧嘩の後、互いの愛情を認め合うこと	0.64	0.69	0.29	0.28
	12	問題に直面したとき、よく話し合うこと	0.52	0.57	0.42	0.14
	13	喧嘩の後、相手を許し合うこと	0.66	0.69	0.42	0.06
	14	喧嘩になっても、別れたくないという意志をお互い示すこと	0.57	0.70	0.24	0.16
	15	喧嘩の後、互いに謝ること	0.60	0.70	0.32	0.06
TRMN 尺度 (恋愛関係崩壊尺度)	16	互いの都合で、会う機会を減らすこと	0.23	-0.11	0.13	-0.45
	17	互いの行動を束縛すること	0.14	0.27	-0.01	0.25
	18	自分以外の異性とのつきあいに互いに口出ししないこと	0.27	0.15	-0.08	-0.49
	19	お互い自分だけの生活を大切にすること	0.49	0.09	0.06	-0.69
	20	二人の将来について話し合わないこと	0.25	0.23	0.08	-0.44
			固有値	6.67	1.11	0.72
			累積寄与率	33.3	38.9	42.5

また、第2因子には「いろいろな話をする事」、「共通した趣味を持つこと」、「お互い、言いたいことを言い合うこと」など、関係形成及び関係維持にまつわる相互作用として記述されていた項目に高い因子負荷が見られた。したがって、これらは関係を維持するにとどまらず、関係をより深めるために行われる相互作用であると考え、第2因子を「恋愛関係深化行動」因子（以下、深化因子と略）と命名した。

さらに、第3因子には「互いの都合で会う機会を減らすこと」、「お互い自分だけの生活を大切にすること」などの項目に高い因子負荷が見られた。これらの項目は、予備調査では関係崩壊時にみられる相互作用として記述されたものである。しかし、これらの相互作用は、関係のあり方や個人の恋愛意識によっては直接的に関係を崩壊に導くとはいえない。むしろ関係を活性化するために必要とされる場合もあり得る相互作用であると考えられたため、中性的な意味を含ませ、第3因子は「単独行動」因子と命名した。

続いて、尺度の内的整合性を検討するため Cronbach の α 係数を算出した。その結果、維持因子では $\alpha = .82$ 、深化因子では $\alpha = .79$ と比較的高い信頼性が得られたものの、単独行動因子では $\alpha = .60$ であった。これらの因子ごとに、投資 (INV: investment)、報酬 (REW: reward)、コスト (CST: cost)、比較水準 (CL: Comparison Level)、選択比較水準 (CLalt: Comparison Level for alternative) の各変数について合計得点を算出し、以後の分析に使用した。

2) 関係関与性尺度の構造

関係関与性尺度について主成分分析を行った結果、すべての項目が第1主成分に高い負荷量

を与えていたため、これらの合計得点を関係関与性の指標として以後の分析に使用した (Table 2)。

Table 2 関係関与性尺度について主成分分析を行った結果

項目番号	項 目 の 内 容	第1主成分
1	二人の関係が長く続く見込みはどの程度ありますか？	0.89
2*	他の人につきあったり、恋人を持たずにひとりであることに対して、あなたはどの程度魅力を感じますか？	0.45
3	これから6ヶ月経ったとき、あなたとあなたの恋人が一緒にいる見込みはどの程度ありますか？	0.89
4	二人が別れるとしたら、その際にどの程度のトラブルが生じるでしょうか？	0.46
5*	恋人以外の相手と新しい関係を求めることに、あなたはどの程度魅力を感じますか？	0.60
6*	この先、あなたが恋人以外の相手との関係を求めたり、恋人を持たずにひとりである見込みはどの程度ありますか？	0.70
7	二人の関係を続けることに対して、あなたはどの程度責任を感じますか？	0.40
8	あなたの恋人は、二人の関係にどの程度関わっていると思いますか？	0.80
9	あなたの恋人は、二人の関係をどの程度続けるつもりだと思いますか？	0.76
	固 有 値	4.22
	寄 与 率	46.9

注：*が付記された項目は逆転項目を示す。

3) カップルの関係関与性を規定する諸変数についての検討

本研究では、カップルを形成している2人のメンバーが、「それぞれ」どの程度関係を続ける意志を持っているのかではなく、「恋人同士」が、カップル全体としてどの程度関係関与性を持っているか、という点に着目している。そこで、以下にカップル単位の関係関与性を説明する要因について分析を行った結果を報告する。

(1) 社会的交換尺度で測定された各変数についての検討

まず、全体尺度に基づくカップルの社会的交換変数がカップル全体の関係関与性にどのような影響を及ぼしているのかについて検討するため、関係満足感、投資、報酬、コスト、選択比較水準についてそれぞれ男女の合計値を算出した。これら5変数を独立変数とし、カップルの関係関与性を従属変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果、カップルの関係満足感 (Beta=.50, $p<.001$) と投資 (Beta=.20, $p<.001$)、選択比較水準 (Beta=-.33, $p<.001$) が関係関与性を規定するという結果が得られた ($R^2=.69$, $F=97.90$, $p<.001$)。すなわち、カップル全体として関係満足感が高く、関係に“尽くして”いるほどその関係の持続可能性は高まる。逆に、恋人以外の相手との恋愛関係を持つことに興味を持っているほど関係の持続可能性は低下することが明らかにされた。このような結果は、投資モデルの第2公式に基づく規定関係が妥当なものであることを示している。

次に、カップルを構成している男女それぞれの社会的交換要因が、カップル全体の関係関与性にどのような影響を及ぼしているのかについて検討するため、カップルの関係関与性合計値を従属変数とし、社会的交換尺度で測定された男女それぞれの関係満足感、投資、報酬、コスト、選択比較水準を独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果、男女それぞれの関係満足感 (男性: Beta=.21, $p<.001$, 女性: Beta=.32, $p<.001$) と選択比較水準 (男性: Beta=-.25, $p<.001$, 女性: Beta=-.17, $p<.01$)、さら

Table 3 カップルの関係関与性を規定する社会的交換尺度の諸変数 (関係満足感こみ・男女合計値)

従属変数		独立変数	Beta	
関係関与性男女計 (N=137カップル)	男女合計	T. STF	0.50	***
		G. INV	0.20	***
		G. REW		
		G. CST		
		G. ALT	-0.33	***
Rsquare=.69				
F=97.90***				

注：* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表中の数値は標準偏回帰係数を表す。

STF：関係満足感

NV：投資，REW：報酬，CST：コスト，ALT：選択比較水準

Table 4 カップルの関係関与性を規定する社会的交換尺度の諸変数 (関係満足感こみ・男女別合計値)

従属変数		独立変数	Beta		独立変数	Beta		
関係関与性男女計 (N=137カップル)	男性	T. STF	0.21	***	女性	T. STF	0.32	***
		G. INV	0.16	**		G. INV		
		G. REW				G. REW	0.16	**
		G. CST				G. CST		
		G. ALT	-0.25	***		G. ALT	-0.17	**
Rsquare=.70								
F=50.07***								

注：* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表中の数値は標準偏回帰係数を表す。

STF：関係満足感，INV：投資，REW：報酬，CST：コスト，ALT：選択比較水準

に男性の投資 (Beta=.16, $p < .01$) と女性の報酬 (Beta=.16, $p < .01$) が関係関与性を規定するという結果が得られた ($R^2 = .70$, $F = 50.07$, $p < .001$)。すなわち，男女ともその関係に満足しており，恋人以外の相手との恋愛関係を持つことに興味を持っていないほど関係関与性は高まり，さらに男性が関係に“尽くして”おり，女性が男性からの働きかけを“ありがたい”と感じているほど，その関係が持続する可能性も高まることが明らかにされた。

これらの結果から，関係満足感や選択比較水準については男女で一致した規定関係が見られたが，男性の投資とそれに対する女性の報酬性の認知が恋愛関係の持続に影響力を持っていることが明らかになった。つまり，男性が尽くし，女性がそれを享受することによって関係が維持されているという構造がそこには認められる。

(2) 恋愛相互作用尺度で測定された各変数についての検討

つぎに，カップルの恋愛相互作用に着目し，RISで測定された3因子<深化，維持，単独行動>×社会的交換要因5側面<投資，報酬，コスト，比較水準，選択比較水準>，計15変数について男女の評定値の総点を算出し，これを独立変数として関係関与性を規定する要因について検討を行った。

その結果，深化因子の男女合計投資量 (Beta=.32, $p < .001$)，単独行動因子の男女合計投資量 (Beta=-.31, $p < .001$)，維持因子の男女合計コスト量 (Beta=-.28, $p < .001$)，維持因子の男女合計比較水準 (Beta=.18, $p < .05$) 及び深化因子の男女合計選択比較水準 (Beta=-.13, $p < .05$) がカップルの関係関与性に影響を及ぼすという結果が得られた ($R^2 = .54$, $F = 29.70$, $p < .001$)。

Table 5 カップルの関係関与性を規定する RIS 因子ごとの合計値
(男女合計値)

従 属 変 数		独立変数	Beta	
関係関与性男女計 (N=135カップル) Rsquare=.54 F=29.70***	男女合計	INV. F 1		
		INV. F 2	0.32	***
		INV. F 3	-0.31	***
		REW. F 1		
		REW. F 2		
		REW. F 3		
		CST. F 1	-0.28	***
		CST. F 2		
		CST. F 3		
		CL. F 1	0.18	*
		CL. F 2		
		CL. F 3		
		ALT. F 1		
		ALT. F 2	-0.13	*
		ALT. F 3		

注：*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表中の数値は標準偏回帰係数を表す。

INV：投資，REW：報酬，CST：コスト，CL：比較水準，ALT：選択比較水準

F 1：関係維持因子，F 2：関係深化因子，F 3：単独行動因子

すなわち、関係維持に関わる相互作用が負担に感じられず、そういった相互作用はある方が望ましいと見なし、また、単独行動は少ないが関係深化のために行われる相互作用が多く、そういった相互作用は他の関係においてはあり得ないと考えているほど、そのカップルの関係が続く可能性も高くなることが明らかになった。

つぎに、上記15変数に関係満足感の男女合計値を加えた計16変数を独立変数とし、関係関与性を従属変数として分析を行った。その結果、関係満足感 (Beta=.63, p<.001) と維持因子の投資 (Beta=.18, p<.01), 及び単独行動因子の比較水準 (Beta=-.23, p<.001) が関係関与性を規定するという結果が得られた (R²=.64, F=74.78, p<.001)。すなわち、カップル全体の満足度が高く、関係維持に関わる相互作用が多いほど、また単独行動はない方が望ましいと考えているカップルほど、そのカップルの関係が持続する可能性が高まることが明らかにされた。

以上の結果から、投資モデルの第2公式、第3公式いずれとも異なった規定関係が恋愛相互作用尺度に基づく資料からは得られているといえよう。

それでは、男女どちらの社会的交換要因がカップルの関係関与性に大きな影響を及ぼしているのだろうか。これについて検討するため、男女ごとに算出した因子ごとの合計値計30変数を独立変数とし、カップルの関係関与性を従属変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果、男性については維持因子の投資 (Beta=.16, p<.05), 深化因子の投資 (Beta=.25, p<.001), 単独行動因子の投資 (Beta=-.16, p<.05) がカップルの関係関与性を規定している一方、女性では単独行動因子の投資 (Beta=-.15, p<.05), 維持因子のコスト (Beta=-.44, p<.001), 深化因子の比較水準 (Beta=.14, p<.05) と深化因子の選択比較

投資モデル

Table 6 カップルの関係関与性を規定する RIS 因子ごとの合計値
(関係満足感こみ・男女合計値)

従属変数		独立変数	Beta	
関係関与性男女計 (N=132カップル)	男女合計	T. STF	0.63	***
		INV. F1	0.18	**
		INV. F2		
		INV. F3		
		REW. F1		
		REW. F2		
		REW. F3		
		CST. F1		
		CST. F2		
		CST. F3		
		CL. F1		
		CL. F2		
		CL. F3	-0.23	***
		ALT. F1		
		ALT. F2		
ALT. F3				

注：* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表中の数値は標準偏回帰係数を表す。

STF：関係満足感

INV：投資，REW：報酬，CST：コスト，CL：比較水準，ALT：選択比較水準

F1：関係維持因子，F2：関係深化因子，F3：単独行動因子

水準 ($Beta = -.21, p < .001$) がカップルの関係関与性に影響を与えるという結果が得られた ($R^2 = .62, F = 29.23, p < .001$)。

すなわち、関係維持及び関係深化のために男性が多く相互作用を行い、男女とも単独行動が少ないカップルほど関係の持続可能性は高く、さらに、女性が関係維持のために行われる相互作用を負担に感じず、関係深化のために行われる相互作用はある方が望ましいと女性が考え、またそのような相互作用は他の関係ではあり得ないだろうと女性が見なしているカップルは、関係が続く見込みが高いことが示唆された。

さらに、上記30変数に男女それぞれの関係満足感合計値を加えた計32変数を独立変数に投入し、関係関与性を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、男女の関係満足感（男性： $Beta = .19, p < .01$ ，女性： $Beta = .32, p < .001$ ）と男性の維持因子の投資 ($Beta = .14, p < .05$)，深化因子の投資 ($Beta = .16, p < .05$) がカップルの関係関与性を高め、男性の単独行動因子の投資 ($Beta = -.12, p < .05$) と女性の維持因子のコスト ($Beta = -.21, p < .01$)，女性の単独行動因子の比較水準 ($Beta = -.14, p < .01$) 及び深化因子の選択比較水準 ($Beta = -.15, p < .01$) がカップルの関係関与性を低下させる要因として働くという結果が得られた ($R^2 = .70, F = 36.63, p < .001$)。

すなわち、男女ともに関係満足度が高く、男性が関係維持及び関係深化のために様々な相互作用を行っているカップルほどその関係の持続可能性は高まるが、逆に男性の単独行動が多く、女性が単独行動はない方が望ましいと考え、また関係維持のために行われる相互作用を女性が負担に感じ、さらに関係深化に充てられる相互作用は他の関係でもあり得ると女性が考え

Table 7 カップルの関係関与性を規定する RIS 因子ごとの合計値 (男女別合計値)

従属変数		独立変数	Beta		独立変数	Beta		
関係関与性男女計 (N=135カップル) Rsquare=.62 F=29.23***	男性	INV. F1	0.16	*	女性	INV. F1		
		INV. F2	0.25	***		INV. F2		
		INV. F3	-0.16	*		INV. F3	-0.15	*
		REW. F1				REW. F1		
		REW. F2				REW. F2		
		REW. F3				REW. F3		
		CST. F1				CST. F1	-0.44	***
		CST. F2				CST. F2		
		CST. F3				CST. F3		
		CL. F1				CL. F1		
		CL. F2				CL. F2	0.14	*
		CL. F3				CL. F3		
		ALT. F1				ALT. F1		
		ALT. F2				ALT. F2	-0.21	***
		ALT. F3				ALT. F3		

注：*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表中の数値は標準偏回帰係数を表す。

INV：投資，REW：報酬，CST：コスト，CL：比較水準，ALT：選択比較水準

F1：関係維持因子，F2：関係深化因子，F3：単独行動因子

Table 8 カップルの関係関与性を規定する RIS 因子ごとの合計値 (関係満足感こみ・男女別合計値)

従属変数		独立変数	Beta		独立変数	Beta		
関係関与性男女計 (N=132カップル) Rsquare=.70 F=36.63***	男性	T. STF	0.19	**	女性	T. STF	0.32	***
		INV. F1	0.14	*		INV. F1		
		INV. F2	0.16	*		INV. F2		
		INV. F3	-0.12	*		INV. F3		
		REW. F1				REW. F1		
		REW. F2				REW. F2		
		REW. F3				REW. F3		
		CST. F1				CST. F1	-0.21	**
		CST. F2				CST. F2		
		CST. F3				CST. F3		
		CL. F1				CL. F1		
		CL. F2				CL. F2		
		CL. F3				CL. F3	-0.14	**
		ALT. F1				ALT. F1		
		ALT. F2				ALT. F2	-0.15	**
ALT. F3			ALT. F3					

注：*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表中の数値は標準偏回帰係数を表す。

STF：関係満足感，INV：投資，REW：報酬，CST：コスト，CL：比較水準，ALT：選択比較水準

F1：関係維持因子，F2：関係深化因子，F3：単独行動因子

ているカップルは、関係の持続可能性が低下することが示唆された。

以上の結果から、恋愛相互作用尺度に基づいて、投資モデルに関わる諸変数の男女合計値を算出して分析を行った場合には、投資、報酬、選択比較水準といった要因がカップルの関係関与性を説明することが明らかにされた。しかし、投資モデルの公式に乗っ取った規定関係は認

められなかった。

また、投資モデルに関わる諸変数について男女別に合計値を算出し検討を行った場合には、これらの変数が関係関与性に及ぼす影響力は男女によって異なった様相を呈することが明らかになった。すなわち、カップルの関係関与性は、カップル内で交換されている全体的な社会的交換要因によって規定されているだけでなく、カップルを構成している男女がそれぞれどのような関係評価を行っているかによっても影響を受けることが明らかにされたといえよう。特に、男性の認知した投資増加につながる相互作用、女性の認知したコスト減少につながる相互作用、及び選択比較水準の低下につながる相互作用の予期がカップル全体のコミットメントを高めていることが示されたことは興味深い知見といえる。ここでも、社会的、対人的資源の提供者としての男性、その享受者としての女性という構造が認められる。いずれにしても、関係への残留・離脱の主導権は女性が掌握している、というのが本研究の調査対象者が持っている特性といえるだろう。

全体的考察

本研究では、カップル全体の関係関与性を規定する社会的交換要因について分析を行った。まず、投資モデルに関わる諸変数について男女別に合計値を算出し、これをカップル内で交換されているすべての社会的交換要因と見なして関係関与性を規定する要因を検討した結果、社会的交換尺度を使用した場合は、従来の知見とほぼ一致した結果が得られたものの、RISを使用した場合は必ずしも投資モデルの公式を支持する結果は得られなかった。

つまり、恋愛関係の認知的側面に着目し、社会的交換尺度を使用して関係全般に対する評価を求めた場合には、投資モデルに関わる諸変数は関係関与性に対してある程度の影響力を持つ。しかし、恋愛関係の行動的側面に着目し、RISを使用して関係の中で行われている相互作用に対して評価を求めた場合には、投資モデルに関わる社会的交換要因によって関係関与性を説明することは困難であることが示された。

とはいうものの、RISの資料に基づく結果は恋愛相互作用の側面によって、カップルの関係関与性を規定するウェイトは異なることが明らかになった。

つまり、関係維持及び関係深化に関わる相互作用に費やされる投資は関係関与性を高める方向に作用するが、単独行動に費やされる投資は関係関与性を低下させる方向に作用することが明らかになった。要するに、投資と見なされる行動には、関係の構築に通じる<正の投資>と関係崩壊に結びつく<負の投資>の二側面がある、ということである。これらのことから、相互作用に対する評価を求めることによって恋愛関係の持続ないし崩壊に対する理解が深まると考えられる。

また、カップルの関係関与性を規定する要因について検討した結果、男女の恋愛相互作用に基づく社会的交換要因はカップルの関係関与性に対して異なる影響力を持つことが明らかにされた。

すなわち、男女別に見た相互作用の社会的交換要因によって関係関与性を規定する要因について検討してみると、男性の投資が多く女性のコストが少ないほど、また女性の選択比較水準が低いほどカップルの関係が持続する可能性が高まることが明らかにされた (Table 7, Table 8)。また、関係満足感は男女ともに関係関与性に対し正の規定性をもっていたが、そのウエイ

トは男性よりも女性の方が高くなっていることが特徴であった (Table 8)。

つまり、本研究のサンプルにおいては、男性がもっぱら資源の提供者として〈尽くす〉ことが重要であり、女性は男性との相互作用から精神的な負担を感じることなく、しかも代替的な関係の価値を低く見積もることによって、恋愛関係が持続しているという、女性主導型の関係が認められるのである。それに加えて、女性が現在の男性との関係に対して不満を感じることも、恋愛関係の持続において重要な側面であることが示唆された。女性が恋愛関係存続の鍵を握っているという知見は、大坊 (1988) の恋愛関係崩壊に関する認知的研究によっても得られており、本研究の資料は崩壊に至る前の段階においても、女性の関係 (相互作用) に対する負の認知の有無が重要であることを示した点が注目される。今後の研究では、関係の持続、崩壊過程における男女の性役割の視点から資料を得ていくことが助けとなるのではないだろうか。

従来の研究においては、個人の関係関与性及び関係満足感によって関係の持続が説明されてきた。これに対し、本研究では、恋愛関係の持続はカップル全体で見た関係関与性及び関係満足感は、カップル全体で交換されている投資モデルに関わる諸変数だけでなく、カップルを構成している男女それぞれが交換している要因によって規定されることが明らかになった。

中村 (1991) では、対人関係の親密度によって関係関与性に及ぼす社会的交換要因の種類が異なることが明らかにされている。中村の研究では、交際相手との親密度を「友達以上恋人未満」と「恋人以上」の関係に分けて分析を行い、恋人以上の親密な関係になっている者の場合には、自分の得た成果量や自分の投資量の多さに替わって、男女の関係投資量の合計と男女が手にした成果量の合計が多いほど関係関与性が強まると言う結果が得られている。

Clark & Mills (1994) は、恋愛関係などの親密な対人関係においては共同規範が優勢になり、交換規範が薄れることを示唆している。また、交際期間が長期化し、親密度が高まると、「われわれ感情」のように、その関係を一つのユニットとして捉える傾向が強まり、社会的交換要因が意識される頻度が低下するということも考えられる。

今後の課題として、まず、社会的交換要因の妥当な測定方法の確立を行うことが挙げられる。その上で縦断的な研究を行い、交際の持続期間ないし交際の進展段階によって、社会的交換要因がどのように変容するのかを検討する必要がある。

引用文献

- Clark, M. S., & Mills, J. 1994 Communal and exchange relationships : Controversies and research. In R. Erber & R. Gilmour (Eds.), *Theoretical frameworks for personal relationships*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 29-42.
- 大坊郁夫 1988 異性間の関係崩壊についての認知的研究 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 64-65.
- Hendrick, S. S., Hendrick, C., & Adler, N. L. 1988 Romantic relationships : Love, satisfaction, and staying together. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 980-988.
- Lund, M. 1985 The development of investment and commitment scales for predicting continuity of personal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 2, 3-23.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 中村雅彦 1990 大学生の友人関係の発展過程に関する研究 : 関係関係性を予測する社会的交換モデルの比較

投資モデル

- 検討 社会心理学研究, **5**, 29-41.
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- 奥田秀宇 1994 恋愛関係における社会的交換過程—公平, 投資, 及び互惠モデルの検討— 実験社会心理学研究, **34**, 82-91.
- Rusbult, C. E. 1980 Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- Rusbult, C. E. 1983 A longitudinal test of the investment model : The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 101-117.
- Rusbult, C. E., & Buunk, B. P. 1993 Commitment processes in close relationships: An interdependence analysis. *Journal of Social and Personal Relationships*, **10**, 175-204.
- Rusbult, C. E., Johnson, D. J., & Morrow, D. G. 1986 Determinants and consequences of exit, voice, loyalty and neglect: Responses to dissatisfaction in adult romantic involvements. *Human Relations*, **39**, 45-63.
- Sternberg, R. J. 1988 Triangulating love. In R. J. Sternberg & M. L. Barnes (Eds.), *The Psychology of love*. Yale University Press. Pp. 119-138.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. 1959 *The social psychology of groups*. New York: Wiley.

<付記>本論文は中田文が平成9年度愛媛大学教育学研究科修士論文として提出した資料に基づいて再構成したものである。